日本名家经典文库
精装插图版

日汉对照
有声版

夏目漱石

短篇小说选集

[日] 夏目漱石 著 | 陈燕 译

世界图书出版公司

夏目漱石短篇小说选集

日汉对照

[日] 夏目漱石 著　陈燕 译

世界图书出版公司
上海 · 西安 · 北京 · 广州

图书在版编目(CIP)数据

夏目漱石短篇小说选集：日汉对照 / (日) 夏目漱石著；陈燕译.
—上海：上海世界图书出版公司，2019.1
（日本名家经典文库）
ISBN 978-7-5192-4928-1

Ⅰ.①夏… Ⅱ.①夏… ②陈… Ⅲ.①日语-汉语-对照读物
②短篇小说-小说集-日本-现代 Ⅳ.①H369.4：I

中国版本图书馆CIP数据核字(2018)第183315号

书　　名	夏目漱石短篇小说选集（日汉对照）
	Xiamu Shushi Duanpian Xiaoshuo Xuanji (Rihan Duizhao)
著　　者	[日] 夏目漱石
译　　者	陈　燕
策划编辑	苏　靖
责任编辑	陈怡萍
封面设计	高家鋆
插　　画	丁天天
出版发行	上海世界图书出版公司
地　　址	上海市广中路88号9-10楼
邮　　编	200083
网　　址	http://www.wpcsh.com
经　　销	新华书店
印　　刷	杭州恒力通印务有限公司
开　　本	787mm×1092mm　1/32
印　　张	6.375
字　　数	112千字
版　　次	2019年1月第1版　　2019年1月第1次印刷
书　　号	ISBN 978-7-5192-4928-1 / H · 1419
定　　价	39.80元

版权所有　翻印必究

如发现印装质量问题，请与印刷厂联系
（质检科电话：0571-88914359）

“日本名家经典文库·日汉对照”系列
翻译委员会

主编

岳远坤（北京大学）

副主编

杨本明（上海理工大学）
陈燕（福建师范大学）

其他译者（按姓氏笔画排序）

于永妍（上海外国语大学）
郭丽（上海理工大学）
廖荣发（日本东京大学）
魏雯（重庆出版社）

本书日语原文配有日籍播音员朗读音频，用微信扫右方二维码，即可免费获取。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

于异乡、日常与梦境的时空中叩问自我

——读夏目漱石的《伦敦塔》《文鸟》《梦十夜》

异乡与梦，古往今来，人们时常透过这两个非日常的异界，审视自己寄身的日常时空，叩问自我。《伦敦塔》《文鸟》《梦十夜》是夏目漱石的三部短篇名作，各自讲述了与异乡、日常、梦境相关的故事。

三部作品中，《伦敦塔》最早问世。彼时，夏目漱石结束了在伦敦的留学生活，回到日本已经两年。在此前的1900年10月至1902年12月，作为日本文部省派遣的第一批国费留学生，夏目漱石在伦敦度过了两年多的时间。在《伦敦塔》一作中，一个于异乡“来不知来处，去不知去向”，心怀惶惑与不安、茕茕孑立的孤独灵魂，跃然于纸上。

《伦敦塔》中，主人公“我”独自一人游览名胜伦敦塔，与心灵对话的是早已深埋于历史中的形形色色的逝者们。作品中，一个个舞台不断切换，令人心惊胆战的逆贼门、曾经人如草芥尸堆如山的血塔、阴森昏暗鬼影幢幢的博尚塔土牢……一个个逝者粉墨登场，失去自由命不保夕的囚犯们、惨遭暗杀的柔弱王子、哀哀乞求的绝望母亲、内心

冷漠行事圆滑的看守、一边唱歌一边霍霍磨刀的刽子手、决然赴死的九日女王简·格雷……景与人，想象与现实，历史与当下，逝者与生者，不断穿梭，无缝结合，自如往来于其间的夏目漱石的沉稳笔力着实让人叹服。字里行间，也留下了夏目漱石在伦敦所接受的艺术熏陶与审美滋养的痕迹——建筑、历史、绘画、戏剧……种种素材，他一一信手拈来，皆成文章。

三年后，夏目漱石发表了《文鸟》。不同于《伦敦塔》略显灰暗的沉重色调，《文鸟》让人感受到一种日常的轻浅呼吸。夏目漱石用十分细腻的笔触，将一只文鸟的到来与离去徐徐道来，生动地勾勒出了鸟儿给“我”沉寂枯燥的书斋写作生活带来的点点微澜。工笔画一般的文字，细致地描写了鸟儿饮水、进食、嬉戏等情节，惟妙惟肖地再现了鸟儿的轻盈身姿与美妙声音。与此同时，在“我”与鸟儿之外，“我”与弟子、“我”与家人、“我”与旧识的美丽女子等“自”与“他”的问题，如宁静水面下缓缓摇曳的水草一般，似隐若现，布于全文。在《文鸟》看似平淡的日常叙事背后，依然隐藏着一个夏目漱石式的凝重追问：于如水一般平静流淌的日常中，死亡意味着什么？哪怕是一只鸟儿的死亡——《文鸟》于细微中见深刻，或可谓举重若轻。

同年夏天，别具一格的《梦十夜》问世。此时，夏目漱石的写作技巧更臻圆熟，他用非凡的想象力构建出了一个个奇幻的无意识世界。十个梦，或思索情爱，或质疑命运，

或追问极限，或探究艺术，或观照信仰，或审视虚实，主题不一，寓意深远，充满了别样的浪漫主义色彩。梦的色调或浓或淡，笔触时轻时重，十个故事中镶满了唤醒读者想象的各种符号，隐喻可谓无处不在：袅袅婷婷的百合花、悟不了“无”的武士、瞎了眼的孩子、活在明治的运庆大师、一路追逐落日向西而去的船只、理发店中映照外界的镜子、悬崖上袭击庄太郎的猪……

其中，时间名词“一百年”数次出现于梦境中，引人深思。第一夜，女人于临终之前与男人定下了“一百年”后的再会之约。第三夜，父亲背负着瞎了眼的孩子行走至杉树底下时，瞬间承受了一桩自己于“一百年”前犯下的杀戮之罪。值得注意的是，这个符号也频频出现于夏目漱石的其他作品中。例如，《伦敦塔》中钟塔上已然沉默了百年的大钟，《永日小品》中等候了“一百年”的女人……如此点点散在的“一百年”，让人不由自主地想要进一步窥望夏目漱石的时空观，一探究竟。

此外，《梦十夜》中令人印象深刻的，还有诸多各具特色的女性角色。“夏目漱石善于将女性神秘的魅力深藏于内涵深沉的表情之内，拜访夏目漱石笔下的这种‘美人’们是阅读他的作品的快乐之一”[①]。第一夜中，百年后化身百合前来赴约的柔美女人。第五夜中，于夜幕中策马飞奔向

① 见《世纪末的漱石》（尹相仁著，刘立善译，新星出版社 2017 年版）第 151 页。

情人却因天探女的恶作剧而堕入深渊的女人。第九夜中，一心祈愿离家的丈夫能平安归来的女人。第十夜中，拐走了兼具所谓美男子与老实人特质的庄太郎的神秘女人……一个个充满魅力的女性形象，展示了夏目漱石兼具东西方视角的独特的女性审美，同时也是作品世界所不可或缺的重要部分。

如此，日常与非日常，短暂与永恒，爱情与毁灭，期许与绝望。以及，男人与女人，有限与无限，父与子，罪与赎，生与死。最后，一切似乎只能回到起点——世界与“我”。不论是异乡、日常还是梦境，置身于其中的“我”，必然直面生的种种欲望，并承受随之而来的无尽孤独、困惑与不安。这或许是每个跨入“现代”的“我”所终须面对的一个命题。

众所周知，夏目漱石被视为日本的鲁迅，他的洞察及思索之深，一直为世人所推崇。作为近代日本较早接触西洋文明的知识分子之一，他关注、书写的不仅是个体的自省，近代日本的社会现实乃至东西方文明的碰撞，无疑也一直都包含在他的视域之中。可以想见，“我”并非单纯只是作为个体的人，同时也是在西洋的映照下，不断寻求自我认同、为何去何从而踯躅徘徊的近代日本的缩影。

一百多年前，明治的文豪夏目漱石用极具“现代性”的笔触轻轻地将问题揭开了一道缝隙。时间流转，我们不知答案，只见线索。

陈燕

目 次

倫敦塔
002
伦敦塔
036

文鳥
070
文鸟
093

夢十夜
115
梦十夜
153

编后记
186

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

倫敦塔

二年の留学中ただ一度倫敦塔を見物した事がある。その後再び行こうと思った日もあるがやめにした。人から誘われた事もあるが断った。一度で得た記憶を二返目に打壊わすのは惜しい、三たび目に拭い去るのはもっとも残念だ。「塔」の見物は一度に限ると思う。

行ったのは着後間もないうちの事である。その頃は方角もよく分らんし、地理などは固より知らん。まるで御殿場の兎が急に日本橋の真中へ抛り出されたような心持ちであった。表へ出れば人の波にさらわれるかと思い、家に帰れば汽車が自分の部屋に衝突しはせぬかと疑い、

朝夕安き心はなかった。この響き、この群集の中に二年住んでいたら吾が神経の繊維もついには鍋の中の麩海苔のごとくべとべとになるだろうとマクス・ノルダウの退化論を今さらのごとく大真理と思う折さえあった。

しかも余は他の日本人のごとく紹介状を持って世話になりに行く宛もなく、また在留の旧知とては無論ない身の上であるから、恐々ながら一枚の地図を案内として毎日見物のためもしくは用達のため出あるかねばならなかった。無論汽車へは乗らない、馬車へも乗れない、滅多な交通機関を利用しようとすると、どこへ連れて行かれるか分らない。この広い倫敦を蜘蛛手十字に往来する汽車も馬車も電気鉄道も鋼条鉄道も余には何らの便宜をも与える事が出来なかった。余はやむを得ないから四ツ角へ出るたびに地図を披いて通行人に押し返されながら足の向く方角を定める。地図で知れぬ時は人に聞く、人に聞いて知れぬ時は巡査を探す、巡査でゆかぬ時はまたほかの人に尋ねる、何人でも合点の行く人に出逢うまでは捕えては聞き呼び掛けては聞く。かくしてようやくわが指定の地に至るのである。

「塔」を見物したのはあたかもこの方法に依らねば外

出の出来ぬ時代の事と思う。来るに来所なく去るに去所を知らずと云うと禅語めくが、余はどの路を通って「塔」に着したかまたいかなる町を横ぎって吾家に帰ったかいまだに判然しない。どう考えても思い出せぬ。ただ「塔」を見物しただけはたしかである。「塔」その物の光景は今でもありありと眼に浮べる事が出来る。前はと問われると困る、後はと尋ねられても返答し得ぬ。ただ前を忘れ後を失したる中間が会釈もなく明るい。あたかも闇を裂く稲妻の眉に落つると見えて消えたる心地がする。倫敦塔は宿世の夢の焼点のようだ。

倫敦塔の歴史は英国の歴史を煎じ詰めたものである。過去と云う怪しき物を蔽える戸帳が自ずと裂けて龕中の幽光を二十世紀の上に反射するものは倫敦塔である。すべてを葬る時の流れが逆しまに戻って古代の一片が現代に漂い来れりとも見るべきは倫敦塔である。人の血、人の肉、人の罪が結晶して馬、車、汽車の中に取り残されたるは倫敦塔である。

この倫敦塔を塔橋の上からテームス河を隔てて眼の前に望んだとき、余は今の人かはた古えの人かと思うまで我を忘れて余念もなく眺め入った。冬の初めとはいい

ながら物静かな日である。空は灰汁桶を掻き交ぜたような色をして低く塔の上に垂れ懸っている。壁土を溶し込んだように見ゆるテームスの流れは波も立てず音もせず無理矢理に動いているかと思わるる。帆懸舟が一隻塔の下を行く。風なき河に帆をあやつるのだから不規則な三角形の白き翼がいつまでも同じ所に停っているようである。伝馬の大きいのが二艘上って来る。ただ一人の船頭が艫に立って艪を漕ぐ、これもほとんど動かない。塔橋の欄干のあたりには白き影がちらちらする、大方鴎であろう。見渡したところすべての物が静かである。物憂げに見える、眠っている、皆過去の感じである。そうしてその中に冷然と二十世紀を軽蔑するように立っているのが倫敦塔である。汽車も走れ、電車も走れ、いやしくも歴史の有らん限りは我のみはかくてあるべしと云わぬばかりに立っている。その偉大なるには今さらのように驚かれた。この建築を俗に塔と称えているが塔と云うは単に名前のみで実は幾多の櫓から成り立つ大きな地城である。並び聳ゆる櫓には丸きもの角張りたるものいろいろの形状はあるが、いずれも陰気な灰色をして前世紀の紀念を永劫に伝えんと誓えるごとく見える。九段の遊

就館を石で造って二三十並べてそうしてそれを虫眼鏡で覗いたらあるいはこの「塔」に似たものは出来上りはしまいかと考えた。余はまだ眺めている。セピヤ色の水分をもって飽和したる空気の中にぼんやり立って眺めている。二十世紀の倫敦がわが心の裏から次第に消え去ると同時に眼前の塔影が幻のごとき過去の歴史を吾が脳裏に描き出して来る。朝起きて啜る渋茶に立つ煙りの寝足らぬ夢の尾を曳くように感ぜらるる。しばらくすると向う岸から長い手を出して余を引張るかと怪しまれて来た。今まで佇立して身動きもしなかった余は急に川を渡って塔に行きたくなった。長い手はなおなお強く余を引く。余はたちまち歩を移して塔橋を渡り懸けた。長い手はぐいぐい牽く。塔橋を渡ってからは一目散に塔門まで馳せ着けた。見る間に三万坪に余る過去の一大磁石は現世に浮游するこの小鉄屑を吸収しおわった。門を入って振り返ったとき、

憂の国に行かんとするものはこの門を潜れ。

永劫の呵責に遭わんとするものはこの門をくぐれ。

迷惑の人と伍せんとするものはこの門をくぐれ。

正義は高き主を動かし、神威は、最上智は、最初愛は、われを作る。

我が前に物なしただ無窮あり我は無窮に忍ぶものなり。

この門を過ぎんとするものはいっさいの望を捨てよ。

という句がどこぞで刻んではないかと思った。余はこの時すでに常態を失っている。

空濠にかけてある石橋を渡って行くと向うに一つの塔がある。これは丸形の石造で石油タンクの状をなしてあたかも巨人の門柱のごとく左右に屹立している。その中間を連ねている建物の下を潜って向へ抜ける。中塔とはこの事である。少し行くと左手に鐘塔が峙つ。真鉄の盾、黒鉄の甲が野を蔽う秋の陽炎のごとく見えて敵遠くより寄すると知れば塔上の鐘を鳴らす。星黒き夜、壁上を歩む哨兵の隙を見て、逃れ出ずる囚人の、逆しまに落す松明の影より闇に消ゆるときも塔上の鐘を鳴らす。心傲れる市民の、君の政非なりとて蟻のごとく塔下に押し寄せて犇めき騒ぐときもまた塔上の鐘を鳴らす。塔上の鐘は事あれば必ず鳴らす。ある時は無二に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com